

夢と現実

小川豊昭

私がこれから述べようとするのは、この「夢と現実」という題から皆さんが想像することとは全く違うことです。今、ここのこの現実とは、意外に捉えがたく、多くの人はこの現実に触れずに人生を送っているということと、充実した人生のためには、内界の今のこの現実と接触していかなくてはならないと言うことを話します。

フロイトの「夢判断」の第七章に次のようなエピソードが語られています。子どもが死に、その通夜の事です。老人に棺の番を任せて一眠りした父親が見た夢として報告されています。夢では、死んだ子どもが生きていたときの姿で現れ、袖を引っ張り「ねえ、お父さん、ぼくが燃えているのが分からないの」と言います。その夢に驚き、はっと目が覚めると、棺を覆う布に蝋燭が倒れて、火が燃え移っていたというのです。今、ここの現実の意識とは、常にこのような夢を見ている状態なのです。つまりこの父親は半覚醒状態で棺が燃えている光を見ているのですが、それに対して無意識が瞬時に作用して死んだ子どもを甦らせ熱病で子どもを失った親の無念な気持ちに訴えかける言葉を語らせるのです。これは、夢の話であって現在の意識ではないと思われるかもしれませんが、人間の意識は常にこのような夢機能が働いていると考えられます。日常的な場面でもよく見れば、現在の意識は、目覚めながら夢を見ているのと同じ作業をしていることが分かります。結局、今の現在の意識というもののすぐ裏側で無意識がその都度働いて、むき出しの現実に対する防衛を行っているのです。

ここでのむき出しの現実とは、子どもの遺体が燃えているという何とも救いの無い現実です。知覚レベルの意識は、まずはこの現実を捉えているのですが、これは、そのままでは意識に上らせることも出来ないトラウマの性質を持っています。すなわちトラウマとしての現実がそこにあるわけです。極論すれば、むき出しの現実とは常にトラウ

マとして心を傷つけているとも言えます。意識は、トラウマとなる現実と常に接しているわけですが、それに対して無意識の夢機能が事後的に、すなわち今の現在からさかのぼってそのトラウマ的現実を修正して意識へともたらすのです。

まずここで問題にしたのは、知覚された外界の現実を意識する場合ですが、同様なことは内界を意識する場合にももっと大々的に起こっていると考える方が自然でしょう。すなわち内界の現実に対しては、常にすでに無意識の夢機能が事後的に作用していて、何か見慣れた穏やかなものに変換して意識させていると考えられます。それこそなかなか意識できないことですが、内界の現実とは、恐ろしく生き生きしたもので、不鮮明ですが、活動的でパワフルで、精神分析などの特殊な技術を用いない限り普通には到達できないものです。

この内界の現実とはとりとめの無い日常の会話でも活発に動いていることが分かります。たとえば、人の噂をしてその人のやり方を批判したなら、それは、目の前の相手を批判する気持ちがあったり、自分の弁護であったりするものは、明らかです。それは何となく相手に伝わるものです。あるいは、患者が「今朝来るときに、渡り鳥が飛んでいくのを見た。しかしよく見るとそれがカラスだったので、驚いた」と語ったならば、それは「先生は、外国まで留学されてすばらしい先生だと思っていたが、カラスのようにお金をがめつく稼ぐ汚い人だと気がついて驚いた」という意味を含んでいると見ることが出来ます。その奥には、生々しい理想化と羨望と怒りなどが激しくうごめいているのが見て取れます。

真に生きるためには、この生々しい内界の現実にもいつも触れていなくてはなりません。そのためにはどうしたらいいのでしょうか。それを結論だけ、羅列しておきましょう。

1. 未知を受け入れ、未知に耐える。
2. 苦痛を味わい、避けない。
3. ナルシズム（自分だけは特別という気持ち）を克服する。
4. 身体感情に親しむ。

特に大切なのは3. のナルシズムですが、本当に謙虚でいて、知的合理化をしないことは難しいことです。（保健科学部）